

REVIEW ESSAY

大澤真幸、2007

『ナショナリズムの由来』

講談社



「新しいナショナリズム」と〈疎外〉感

——サバイバルへの処方箋と在日朝鮮人——

韓 東賢

1 はじめに

「人類最後の難問 ナショナリズムを解く！」（帯より）——本書『ナショナリズムの由来』は、社会学者の大澤真幸による 877 ページにおよぶ大著である。その大著ぶりも含め、2007 年の大きな話題作となった¹。著者によると、本書の問いと目的は以下のようなものである。

本書で、われわれは、次のような問いをめぐって考察する。ネーション（国民、民族）とは何か？ ナショナリズムとは何か？ ネーションと見なしうる共同体の起源をどこに見定めるべきか？ そして、人がネーションに魅惑され、ナショナリズムに捉えられるのはなぜ、そしていかにしてなのか？ 要するに、ネーションとナショナリズムの本性を、そしてまた、それらが成立して、人々を捕縛するメカニズム機制を解析することに、本書

の目的がある（p13）

では著者は、その「人類最後の難問」をどのように解いたのか。

つまり、本論の——ナショナリズムと並ぶ——もう一つの主役は、「資本主義」である。われわれは、資本主義との関連で、ナショナリズムを解析することになるだろう。（p46）

本書で著者は、ひとことで言うと「資本主義」の誕生と昂進——つまり近代化・資本主義化・グローバル化——が招く規範の抽象化、空洞化という従来からの一貫した問題関心にもとづき、共同体の規範の妥当性を保証する「第三者の審級」という著者独自の概念装置を使って、ナショナリズムを読み解いていく。

第 1 部では、「ナショナリズムの原型」を考察することに目的がある。ここでは、主と

して、19世紀から20世紀の前半に成熟を迎えたナショナリズムがどのような現象であり、その時期にナショナリズムが誕生したのはなぜなのかが考察される。……第2部は、20世紀の最後の四半世紀以降に現れる、ナショナリズムの過剰性を説明することに充てられる。ここでは、ナショナリズムの多様な現れを一貫した理論的視野の中に収めること、原型となるナショナリズムからどのような転回が現在を帰結しているのかを説明すること、こうしたことに、とりわけ重点が置かれている。(p47)

第1部「原型:ナショナリズムの由来」では、近代化・資本主義化・グローバル化の運動の中で進む規範の普遍化、空洞化（それは「第三者の審級」の抽象化でもある）に対して、その穴埋めとして、特殊・個別的な規範がさも普遍主義的なものであるかのように特定の文化・言語共同体に適用されるところに、つまり、普遍主義と特殊主義・個別主義が交錯するところに古典的ナショナリズムの成立を見出している。

次に第2部「変形:ナショナリズムの最後の波」では、第1部で議論した「ナショナリズムの原型（古典的なナショナリズム）」とは異なる「新しい（現代的な）ナショナリズム」が生成するメカニズムを明らかにしていくのだが、その論理展開の核となるのが、普遍化を志向する資本主義的なシステムのもとで永遠に構成され続ける〈外部〉の存在である。

著者は、その重要な事例として在日朝鮮人²作家、金鶴泳（きん・かくえい／キム・ハギョン）とその作品論を取り上げているのだが、これは、在日朝鮮人研究を専門とする評者にとって大変興味深かった。少なくとも日本国内にお

いては「(過度に) 政治的に特殊化された」きらいのある在日朝鮮人というミクロな事例が、ポリティカルなポストコロニアルの文脈に位置づけられることはあっても、ナショナリズムを理論的に読み解き一般化するといった本書のような作業で核となる事例として取り上げられることは、管見の限りほとんどなかったように思う。

しかも著者は、評者の読みが正しければ、金鶴泳をもう一人の在日朝鮮人作家、李恢成（り・かいせい／リ・フェソン）と比較しつつ、その違いを論じることで「新しいナショナリズム」を二つのタイプに類型化する作業を行っているが、ルーツのある「本国」と生活の場である「ホスト国」という両軸を基準にそれぞれへの帰属の度合いを計測するといったエスニシティ論、移民論の枠組み以外で、在日朝鮮人内部の「差異」について取り上げた議論もそう多くない。

そのため、本書における著者の議論に評者の問題意識を接続することは、朝鮮学校³ コミュニティを中心とする在日朝鮮人を現在の研究テーマとしている評者にとって、意義があることだと考えた。著者の議論は（もしかすると著者の意図がそのようなものでないにせよ）、少なくとも評者の問題意識に照らしてみても十分に示唆的なものになりえている。これが、本書を取り上げる理由である。

本稿は、本書第2部における「新しいナショナリズム」に関する議論を、著者によれば限らない〈外部〉化によって生まれるとされるナショナリズムという現象に接近するとともに、現代日本社会におけるその「乗り越え」、言うならばサバイバルを図っていくための処方箋作りには何かの示唆を与えることをひとつの目的として、評者自身の問題意識に引きつつ読み

解き、検討するものである⁴。

2 資本主義と「〈外部〉化の無限ループ」

まず、著者が本書第2部で展開した「最後・後のナショナリズム」についての議論を、評者なりにまとめてみたい。

この最後・後のナショナリズムは、人が民族の差異に執着することの社会的な必然性（必要性）があらたかなくなったように見えるまさにそのときに、すなわち民族が瑣末なものへと転じつくしたまさにそのときに現れ、その力を拡大しつつある。(p645)

著者のいう「ナショナリズムの最後・後の波」とは、人的・物的・情動的な交流のグローバル化と同時代的に生じている、20世紀最後の四半世紀以降（とりわけ冷戦終結以降）のナショナリズム群のこと、である。これは、アンダーソンが「ナショナリズムの最後の波」とみなした（Anderson 1991=1997）、アジア・アフリカの植民地独立運動を駆動したナショナリズムの「後」、つまり現在にいたる時代のナショナリズムを指す。

では、この「新しい（=現在の=最後・後の）ナショナリズム」の新しさはどこにあるのだろうか。著者の整理によると、古典的なナショナリズムが「局地的な共同体に分立している人民を国民化する運動」であるのに比べ、新しいナショナリズムは「古典的ナショナリズムが創出した『国民』を規準においたとき、それをまったく対立する二つの方向へと引き裂こうとする運動の中で立ち現れる」ものである。その二つの方向とは、①特殊主義的傾向——エスニシテ

ィの小単位への拘泥：国民（あるいは国民-国家）を、民族（エスニシティ）という共同性のより小さな単位へと分解する方向と、②普遍主義的傾向——グローバル化（「帝国」）：国民を、インターナショナルな、より大きい政治的単位の中に還元しようとする方向、である。ここで重要なことは、このように国民を逆方向へと引き裂く二つのベクトルが、（循環的というレベルにとどまらず）正確に連動しているという指摘であろう。

著者は、このような新しいナショナリズムは、資本主義的な世界システムの昂進によって生まれたと主張する。著者によれば、資本主義的な世界システムは、経験可能領域を不断に普遍化していくシステムであるにもかかわらず、いやむしろだからこそ、第三者の審級の規範的な配慮から排除されてしまう盲点を持っている。そしてその盲点は、資本主義的な社会システムの規範の作用域に対して、〈外部〉を構成する。つまりひとこと言うと、普遍化を志向する資本主義的なシステムのもとでは、経験可能領域の中に編入されない〈外部〉が残存せざるをえないのだ。

そして著者は、そのような〈外部〉におかれた者たちが、排除され、疎外された、否定的な状態を克服するプロセス、つまりは「第三者の審級」を獲得していくプロセスそのもの、もしくはそこに生まれるのが「新しいナショナリズム（もしくはその萌芽）」だという仮説を提示する。「〈外部〉に残された人々の「語りえぬ」という否定的な状態の克服を可能にする（必要）条件として『最後・後のナショナリズム』があったのではないか」（p652）と。そして、この仮説を検証するために動員される事例が、クレオールや在日朝鮮人の文学作品であるのだが、

それについては次節で詳述する。

本書第2部において以上のように議論されている「新しいナショナリズム」だが、「もしくはその萌芽」と但し書きをしたように、それは、その「萌芽」段階とされる「無限判断」的なものと、「完成されてしまった」段階の「否定判断」的なものという、二つのモデル、二つのバリエーションとして提示されているように思われる。本書においてそれらは明確に類型化されておらず、両者の関係についての記述も揺れているが、とりあえず評者なりに説明してみたい。

本書によれば、「無限判断」と「否定判断」、そして「肯定判断」とはカントの用語である。通常の判断においては、その対象を指示する主語に対して、肯定的・否定的な述語が付される。したがって、主語が指示する対象の（現実的・可能的な）存在は、肯定判断・否定判断の共通の前提である。だが、この共通の前提そのものが否認される場合がある。それは、肯定されたり否定されたりする「主語」が、経験可能な対象として存在していないからである。そのため、肯定判断でも否定判断でもない無限判断とは、主語によって指示されている対象の存在を積極的に否認する操作であり、肯定判断と否定判断を可能なものとしている、共通の土台を否認している。

言い換えると、肯定判断・否定判断はともに、任意の可能な行為と体験に言及する規範のまったき普遍性への言及を含んでいる。しかし著者によればいまや、このような意味での「規範の実定的な普遍性」は不可能である。つまり、普遍的な規範によって指示された、行為の包括的な領域——完全に包括的な経験可能領域——が、統一的な全体性をもって存在している、とみなすことはできない。著者によれば、このよ

うな状況において、「語りえない」サバルタンが獲得した文学、その言語は、「無限判断」的なものとなる。

このようなものとしての「無限判断」的なナショナリズムに、後述するがおそらく著者はこの状況の「向こう側」に乗り越えていく希望を見出している。著者はこれを「古典的／古いナショナリズム」から逆説的に到達した、新しいナショナリズムの「萌芽」や「過渡期」的なものだのみならず、その象徴が金鶴泳である。本稿ではさしあたり「無限判断モデル」と呼んでおこう。

次に、「伝統」をねつ造し執着して、状況の「こちら側」に戻ってきってしまうものとして著者が憂慮しているのが、本書で明示されていないものの、おそらく近年の“悪しき”ナショナリズムを念頭に置いたであろう「否定判断」的なナショナリズムであり、それは「完成されてしまった」新しいナショナリズムである。もう一人の在日朝鮮人作家、李恢成は、こちらに位置づけられているようだ。こちらは「否定判断モデル」と呼ぶことにする。

次節では、主に著者が評価している前者の「無限判断モデル」について、金鶴泳論の展開との関連を中心に検討を続ける。

3 サバルタンとしての在日二世作家、金鶴泳

1938年9月、在日朝鮮人二世として群馬県に生まれた金鶴泳は、地元の小中高を経て58年、20歳のときに東京大学理科I類に入学し、それを機にそれまでの「山田」から本姓の「金」を名乗るようになった。そして63年、25歳で同大学院化学系研究科に進学し、在日朝鮮人女性と結婚。66年、28歳のときに処女作「凍

える口」が文芸賞に入選して『文芸』11月号に掲載され、69年、31歳のときに博士課程を中退して本格的に作家の道を歩み始める。その後、4回にわたって芥川賞候補に選ばれるなど文学の世界で活躍する一方、民族系メディアの『統一日報』にエッセイを執筆し非常勤論説委員を務めるなど在日文化人、論客としての活動にも意欲的だったが、1985年1月、群馬県の実家で自殺し、46年の生涯を終えた⁵。諸説あるが、1970～80年代に朝鮮籍から韓国籍に変更したと言われており、日本国籍は取得していない。

著者は、在日朝鮮人二世としての金鶴泳を、「新しいナショナリズム」（次の引用においては『最後・後のナショナリズム』）において、次のように位置づけている。

この二世作家（評者注：金鶴泳のこと）に、「最後・後のナショナリズム」に先立ち、それを準備する微妙な段階の様態を、「最後・後のナショナリズム」が完成してしまったときには見えなくなってしまうような微妙な状態を、見出すことができるのではないだろうか。この場合、とりわけ在日朝鮮人の「二世」であるということが、鍵になっているのかもしれない。一世は、朝鮮人としての民族的な同一性に根を張っている。三世は、逆に、法的にはともかく、文化的・精神的には、しばしば、あまりにも日本人に同化してしまっている。二世は、その両義性によって、それぞれ、「クレオール性」に類する何かを生きることになる。（p507）

いわば萌芽的な、過渡期的な、「微妙な状態」。それは前節でも述べたように、〈外部〉に残さ

れ続ける者たちが「語りえぬ」状態から「語ること」を可能にするメカニズムそのものであり、著者は、そのメカニズムを説明するために金鶴泳論を展開していく。それは、金鶴泳自身が抱えていた“吃音”という身体的ハンディキャップをテーマにした1966年の処女作「凍える口」を中心としたもので、もっともよく知られた金鶴泳論である竹田（1983）に依拠している。

著者によると「凍える口」には、「在日」であるという事態に由来する金鶴泳（もしくはその人格の投影である主人公）の民族的帰属の困難が、第一次的には、直接に身体的な「語ることの困難」、つまり“吃音”という身体的症候として現れている。さらにその不遇感、父に拒否されているという感覚とセットになっている。

この時代の他の在日文学同様、金鶴泳作品の主人公たちも「民族主義」の問題に直面するのだが、彼らは、日本社会で否定的に評価されているという現実を補償する、帰属の場としての「民族（ネイション）」を幻想的・想像的に措定する「民族主義」を受け入れることはできない。こうして、「普遍的」な共同性としての日本社会からも、「特殊」な共同性としての民族からも疎外された彼らの位置は、資本主義的な社会システムが必然的に生み出し続ける〈外部〉なのだ。またここで、彼らが受け入れることができないその「民族主義」は、金鶴泳にとっての「父」であり、「第三者の審級」である。にもかかわらず、その欲望、意志は決定不能のままに放置され、息子にとって父は不可解な存在となる。それゆえ「語りえない」というその状態が、“吃音”に象徴されているのである。

このように〈外部〉に宿る「第三者の審級」の意志の決定不能性も、繰り返しになるが資本

主義的な社会システムが必然的にもたらすものである。くどいようだが言い換えると、資本主義的な社会システムはそれが経験可能領域の普遍化を目指す運動であるゆえに、必然的に、無限に〈外部〉を生み続け、その〈外部〉にとっての第三者の審級の抽象化を招き続けるのだ。このように、第三者の審級の意志の決定不能性は、「(私について) 語ること」の困難・不可能性を帰結する。

しかし、金鶴泳作品の息子は、のちに父と奇妙な形で〈和解〉し、「語ることの困難」を克服する。それはつまり、不可能性の乗り越えと第三者の審級の回帰を意味するのだが、その〈和解〉のどこが奇妙なのか。ひとことで言うとそれは、通常——例えば本書では別の在日朝鮮人作家、李恢成の作品と比較しているが——とは違って、父を反復的に拒絶し、父との和解に繰り返し失敗し続けることによる〈和解〉だからである。拒絶と失敗の反復が、父との独特な〈和解〉の様式として確立していったのだ。

このような〈和解〉の形式による、このような「語ることの困難」の克服に、著者は「新しいナショナリズム」の「萌芽」を見出しており、これこそが「無限判断モデル」なのである。これに対して李恢成作品の息子は、父を受け入れ和解することで第三者の審級を獲得するのだが、おそらくそれは「新しいナショナリズム」の「完成形」としての、「否定判断モデル」なのだ。「萌芽」としての「無限判断モデル」を体現する金鶴泳と、「完成形」としての「否定判断モデル」を体現する李恢成——この両者は著者にとって、同じ〈外部〉ではないのか？

それならば、〈外部〉とは誰のことなのか？
原理的には、それは、誰でもありうる。資本

主義のダイナミズムの昂進は、述べてきたように、〈外部〉という規定性を、社会システムの全体へと浸潤させていくからである。とはいえ、システム内には、〈外部〉性が顕著に現れる脆弱な部位がある。それが、たとえば「サバルタン」と呼ばれているような一群の人々である。すでに論じてきたように、(古典的) ナショナリズムは、世界システムの「階級」的な分割の中で、つまりコロニアリズム植民地主義を帰結することもある「中核／周辺」の分割の中で、結晶する。〈外部〉性を突出させうる部位とは、こうした階級的な構成の中で、二重に疎外されている人々である。階級的なヒエラルキーの中で「周辺」的な位置に置かれているということ——一重の疎外——のみでは、必ずしも〈外部〉的とは言えない。たとえば、(旧) 植民地に所属しているということ自身は、〈外部〉性を意味しない。それは、植民地に生まれる(古典的) ナショナリズムの中で、肯定的な承認を得ることができるからである。〈外部〉性とは、だから、「周辺」において、さらに疎外されている人々の状態である。(p542)

つまり、こういうことである。「周辺」的な位置に置かれているはずの在日二世であっても著者にとっては、民族的帰属を象徴する父を受け入れ和解することで第三者の審級を獲得する李恢成(の作品、その主人公)の状態は「一重の疎外」に過ぎず、〈外部〉性を象徴するような意味でのまったき〈外部〉の姿ではない。父を拒絶し続け和解に失敗し続けることによって逆説的に和解するといった奇妙な〈和解〉によって第三者の審級を回帰する金鶴泳(の作品、その主人公)こそ、「二重に疎外」されること

で〈外部〉性が顕著に現れた、いわばまったき〈外部〉としての「サバルタン」の姿なのである。

4 憂慮される〈外部〉としての日本の若者

著者は、サバルタンであることによる第三者の審級からの疎外を、そのサバルタン性を逆説的にバネとすることで突き抜けていくような形で「新しいナショナリズム（の萌芽であり、それは『無限判断モデル』）」のあり方に共感を示しつつ、そこに、第1部で議論した「古典的／古いナショナリズム」への回帰に等しいと著者がみなす「新しいナショナリズム（の完成形であり、それは『否定判断モデル』）」に拘泥することからの脱却をはかるための希望を見出しているようだ。

本書ではないが、竹田の金鶴泳論に言及しつつ、そのような問題意識をよく示している著者本人の発言があるので、多少長い以下、引用したい。

ぼくらは長い間、どこか西洋から由来する近代的な世界観を受け容れながら、しかし体の中では別の伝統ももち、しかしその別の伝統に対してあまり自信をもっていない、という状態を生きてきた。そのときに、そのねじれをむしろうまく利用して、近代の向こう側に行く手があると思うんです。このときに、気をつけないといけないのは、「向こう側」に出るのではなく、「こちら側」に戻ってきてしまうということです。つまり、具体的には、先ほどから警告しているように、西欧的なグローバル化の中で覚えるコンプレックスを解消する手段として、「伝統」を半ば捏造しつつ、その「伝統」に執着する、というの

が、「こちら側」に出るということです。

逆に、「向こう側」に行くというのは、どうということなのだろうか。例えば、ここでぼくは竹田青嗣さんが、若い頃に書いた『〈在日〉という根拠』（国文社）という本での主張を思い起こします。ここで、竹田さんは、在日二世の作家を批評している。在日の二世は、必ず、朝鮮ナショナリズムの問題にぶつかり、多くの人がナショナリストになる。しかし、竹田さんは、彼らが希求する「民族」は、彼らが日本社会で感じている不遇感やルサンチマンを投影した幻想に過ぎないとして、ナショナリズムに批判的です。そのとき、彼は、〈在日〉という移行性を〈根拠〉にする、第三の道がないか、と示唆する。これは、ハンナ・アーレントの「自覚的パリア」というのに似た主張だと思えます。

これは、朝鮮の民族性にも、また日本社会にも、それぞれ部分的に惹かれながら、またどちらにも全面的に同一化できないときに、それらの間の逆説の関係をバネにして、両者を乗り越える道を見出そうという試みです。ぼくが、逆説を逆用しようというときに、一つのイメージを与えるものです。（佐伯・大澤 2005:200-201）

竹田を引用しつつアーレントに言及していることから分かるように、このような〈外部〉の〈外部〉性に仮託しつつ、その逆説をバネとして逆用するという「乗り越え」方は、一部のポストモダン的な思想とも共通するものと言えそうだ。では、それは具体的にはどのようなものであり、いったい誰に向けたものなのか。

本書出版後に寄稿した新聞のコラムで著者は、真の〈普遍性〉は葛藤そのものに内在して

いるはずだと指摘したうえで「他者が、まさに他者である限りにおいて接近してしまう」という逆説的な方途を示し、具体例として「相手がタリバーンであるか否かなどに拘泥せずに近づき、アフガニスタンで一緒に井戸を掘り続ける医師・中村哲氏の活動のようなもの」をあげる(『朝日新聞』2007年9月15日付「異見新言」)。

また別の新聞記事でも、「日本人であるという意識を持ちながら、縁もゆかりもない人たちと共に汗を流すという偶然的な関係性を引き受ける」中村氏らの生き方は「究極的な偶然を必然として受け入れる」行為であり、それが「偏狭なナショナリズムを超えるきっかけになると思う」と語る著者は、このような処方箋を、さらに「愛」という言葉で説明する。「誰かを深く愛せば、相対的に他の人には無関心となってしまう。それはナショナリズムと同様に『狭量』と言われることかもしれないが、多文化主義のように『すべての人を愛す』という方が、よほどさんくさい。その両側を横断する何かを見つけ、制度としていくことが、これからの課題でしょう」(『読売新聞』2007年11月7日付)。

さらに別の雑誌インタビューにおいても、包括的で普遍的な問題に興味があっても世界の複雑さによって「政治的有効性感覚」を持たない若者たちが、その興味を特殊性へと屈折させた形で現してしまうもののひとつがナショナリズムであると指摘したうえで、やはりアフガニスタンにおける中村哲氏らのNPO活動に偶然参加するようになった若者を例にあげ、次のように述べる。「本来の根本的な問題に関わりたいという気持ちと、身近な人間関係からだったら何とかやっていけるぞという、このふたつを組み合わせればそれをベースにして色々な世界が広がっているわけですね。アフガニスタン

でNPO活動をしていれば、それをきっかけにしてもっと着実な世界や政治に対する関心へと転換していくでしょう」。著者によれば、以前は無気力で鬱っぽかったというその若者は、アフガニスタンでのNPO活動を通じて生気を取り戻すことになったという(「ナショナリズムとどうつきあうか——大澤真幸インタビュー」『STUDIO VOICE』2007年8月号)。

著者は同じインタビューで、映画『GO』で在日朝鮮人青年を演じることで「逆説的に」右傾化してナショナリストになってしまった俳優、窪塚洋介の例もあげているが、このように見ると、著者が「否定判断モデル」としての「新しいナショナリズム」の担い手として憂慮している対象が誰であるのかはおのずと明らかになってくる。おそらく著者の念頭に置かれているのは、そのような、昨今はびこっているとされる、著者にとっては“悪しき”ナショナリズムに容易に流れやすい、いわば〈疎外〉された日本の若者たちすべてなのではないだろうか⁶。彼らは、本来の定義においてはサバルタンどころかマイノリティでもないが、著者いわく、資本主義的な社会システムにおいてすべての人は疎外され〈外部〉になっていくのだから、論理的帰結としては正しいと言える。

これについては評者も同意する。マジョリティ/マイノリティ、そしてサバルタン性は相対的なものに過ぎない。資本主義的な社会システムの昂進とグローバリゼーションの進行は新たな線引きのルールをもたらし、いまや誰でも〈外部〉になりうるのだ。数十年前と現在とでは、〈疎外〉のルールもその形態も大きく変わり、もはや〈疎外〉はマジョリティ/マイノリティという線引きに関係なく誰にでも降りかかりうるものとなった。

だとすれば、実は、憂慮すべきなのはむしろその個々人の内面——〈疎外〉感だと言えるのではないだろうか。本書において著者は、〈外部〉化による〈疎外〉感がナショナリズムを駆動させており、言い換えるとその欠落を埋め合わせようとするプロセス、メカニズムそのものがナショナリズムだと述べている。憂慮すべきなのが〈疎外〉感なのであるとすれば、普遍なり第三者の審級なりを確保して自分自身を相対化すること、それ自体が重要なのであって、そう考えると、例えばそのための取りあえぬ処方箋が「あえてナショナリストになること」であっても構わないのではないだろうか。もちろん、「あえてアナーキストになること」であってもいい。

だがそもそも、「〈外部〉化の無限ループ」（＝サバルタン化）と、〈疎外〉感は本当に平行な関係で、必然的に結びつくものなのか。資本主義的な社会システムのもとですべての人が〈外部〉と化し、〈疎外〉されていくのだとしたら、人はみな〈疎外〉感から逃れられないのか。著者によると、おそらく〈外部〉化と〈疎外〉の無限ループは不可避なことなのだ。だとしたらやはり、著者に即して言えば第三者の審級（もしくはそれに代わるもの）をいかに確保するかは、個々人のアイデンティティの危機を回避するための緊要な課題となるはずだ。

次節では、評者の関心事である朝鮮学校コミュニティを中心とする在日朝鮮人という事例に引きつけ、この問題を考えてみたい。

5 「どちらでもない何か」を育んだ朝鮮学校という場

3節で評者が整理したように、本書において

著者は在日二世の文学を事例に、民族的帰属を象徴する父を受け入れ和解することで第三者の審級を獲得する李恢成作品に、「否定判断」的な「新しいナショナリズム（の完成形）」が現れているとした。これが、本稿においては新しいナショナリズムの「否定判断モデル」である。

一方で、父を拒絶し続け和解に失敗し続けることによって逆説的に和解するといった奇妙な〈和解〉によって第三者の審級を回帰する金鶴泳作品には、「無限判断」的な「新しいナショナリズム（の萌芽）」が現れているとした。これが、新しいナショナリズムの「無限判断モデル」である。金鶴泳作品で描かれているのは「普遍的」な共同性としての日本社会、「特殊」な共同性としての民族の間で引き裂かれ、どちらとも相容れられずに宙吊りになった二世の姿であり、これこそが著者にとっては、二重に〈疎外〉されることで〈外部〉性が顕著に現れた、いわばまったき〈外部〉としての「サバルタン」の姿なのだ。著者はこの姿に「乗り越え」への希望を見出している。

このように、金鶴泳作品が体現しているような「無限判断モデル」に在日朝鮮人二世の「真の〈外部〉性」を見出している著者の認識は、一般的には間違っていない。例えば金泰泳は、「朝鮮半島生まれの一世とは異なり、二世にとって『祖国』とは、実体験をともなわない抽象的なものにならざるをえなかった。日本社会からの差別的処遇による疎外感、そして『抽象化された祖国』の間で、二世は、自らのアイデンティティをどこに求めればよいのか分からずにさまよっていた」（金 1999:90）と指摘する。近年、登場し始めた60～70年代を再検討する形の在日二世論をはじめ、在日二世のアイデンティティに関する言及は、「不遇意識」や「自

己否定」といった、〈外部〉としての〈疎外〉感に満ちた用語であふれており、それはある時期までの在日文学や映画などにも反映されている。

しかし、同じ二世でも朝鮮学校に在学した者でそのような〈疎外〉感を持つ者はそう多くない。例えば自身の朝鮮学校体験を小説化した『GO』で直木賞を受賞した金城一紀にもその傾向が顕著だが、むしろそうした「在日」像に強い違和感を持っている（韓 2004）。しかし、彼らが日本社会における〈外部〉であることは間違いなく、だとしたら彼らも「新しいナショナリズム」を担い手となりうるはずだ。では、彼らにとっての「新しいナショナリズム」とはどのようなものなのか。

朝鮮学校の歴史は1945年8月15日の日本敗戦＝朝鮮解放直後に始まった。それは、日本による植民地支配を脱した主に在日朝鮮人一世たちが、帰国を念頭に置き、長きにわたる日本支配のもとで言葉を奪われた子どもたちにまずは言葉を教えるために始めた寺子屋式の民族教育が、本国事情の複雑化により定住化が進む状況の中で、徐々に学校としてのシステムを整えていったものである。本書の事例とされているような在日二世文学に例えて言うなら、朝鮮学校は、民族的帰属のあて先として作られたと言ってもいい。それは、植民地経験による〈疎外〉感を克服し、それと決別するための場、ひとつの自律的な共同体であった。

その後、1948年の朝鮮民主主義人民共和国建国と50～53年の朝鮮戦争、55年の在日朝鮮人総聯合会結成、50年代後半の帰国運動などを経て、朝鮮学校は民族的帰属を超えて「祖国」を代替する帰属先となっていく。外村（2004）によればこの時期、一世から継承され

たものではなく二世が新たに作り出したものとして在日朝鮮人の「祖国志向型ナショナリズム」が確立されるのだが、二世が創造したそれは、言うまでもなく本書における「新しいナショナリズム」であろう。評者の見解では、その「祖国志向型ナショナリズム」をもっとも顕著に体现しているのが朝鮮学校コミュニティの人々なのだが、だとすればそれは、本書の枠組みにおける「否定判断モデル」なのか、「無限判断モデル」なのか？

在日朝鮮人を民族主義が捉えるのはなぜか？ その説明はさして難しくはない。朝鮮人であるということは、日本社会の中では、一般的には、差別される——否定的に評価される——規定性である。この否定性そのものを否定し、同時に、一種の反作用として、積極的・肯定的な帰属の場としての「ネーション民族」を措定すること、これが、ここで論じている民族主義である。在日朝鮮人作家にも、こうした理路に従って、民族主義に参与していった者は、少なくない。（p511）

「否定判断モデル」の李恢成でも、「無限判断モデル」の金鶴泳でも、作品の主人公たちは二世に共通する足かせとしての民族主義の問題に直面する。著者は、それをどのように受け入れるか、〈和解〉するか——いわばどのように処理するかによって、そこに生まれる「新しいナショナリズム」を「否定判断モデル」か「無限判断モデル」かに分類した。先の引用に沿って言えば、「民族主義に参与していった者」が「否定判断モデル」の李であり、そうでない形で〈和解〉を成し遂げたのが「無限判断モデル」の金鶴泳である。しかし、戦後に生まれ、物心つい

たころから朝鮮学校に通っていた二世のほとんどは、そもそも当初からその壁に直面しない。彼らにとって、そのあて先を共同体としての学校が代替している民族的帰属は自明なものであった。

さらに60～70年代、彼らの「祖国志向型ナショナリズム」は、「近くて遠い」日朝間の激しい落差によって徐々に抽象化し、逆説的に普遍化に向かっていく。こうして朝鮮学校は、著者いわく〈外部〉である彼らが見失うはずの第三者の審級（もしくはそれに代わるもの）を、「こちら側」へ戻ってきてしまうのではない形で、自給自足し、再生産できる空間となっていた。そこで育った彼らは、著者の言い方だと「否定的な規定性」を自らのリアルな実存としては抱いておらず、そのために著者の言うような「民族主義」の問題を、受け入れたり〈和解〉したりしなくてはならない、つまり切迫した処理が必要な対象ではなく、放置したり、場合によってはネタとして使いこなすことのできるような、適度な距離を保てる対象としてみなすことができるようになった。

このような空間で生まれた彼らのナショナリズム（それをナショナリズムと呼ぶのなら）が、少なくともある時期までの朝鮮学校出身者が共通して持っているように見える強い自己肯定感の土台になっており、彼らをして〈疎外〉感、いわばサバルタンのエートスを持ちにくくさせている。彼らの、いわばその「抽象化」されたナショナリズムは、おそらく著者のいうところの「否定判断モデル」でも、「無限判断モデル」でも、そのどちらでもないものとして（それどころか、もしかすると「乗り越え」の必要すらない「肯定判断」的なものとして）存在していたのではないだろうか。

6 おわりに

精神科医の香山リカは、サバルタン論の第一人者であるスピヴァクの新刊に対する書評の中で次のように指摘している。

サバルタンは、紛争が続く遠い国の問題なのか。そうではない。低賃金にあえぎながらどこにも行けず、自己責任と思込まされている日本の若者も、サバルタンと言ってよいのではないか。（香山リカ「ガヤトリ・スピヴァク『スピヴァク みずからを語る』、J・パトラー、G・スピヴァク『国家を歌うのは誰か？』書評」『朝日新聞』2008年7月20日付）

サバルタンやマイノリティという用語を使っているかどうかはともかく、このような認識は、若年就労問題やワーキングプア問題を中心とする、日本における最近の格差社会論に共通するものだと言っていいのかもしれない。

そのような議論の中心的論客である雨宮処凛と、ナショナリズムの研究者である萱野稔人は対談で、「生きづらさ」を抱える日本の若者たちが生き延びるためには、自己責任論の呪縛に陥るより、ナショナリズムや宗教という社会的なものに向かう方が「まし」だと主張している（雨宮・萱野2008）。近年、かつてのポストコロニアル的な国民国家批判、ナショナリズム批判に代わって、「方法としてのナショナリズム」を唱える論者⁷なども登場してきているが、このような主張もそのひとつのバリエーションと言えるかもしれない。

同時に、おそらく本書の著者である大澤真幸が“悪しき”ナショナリズムだとみなしているような、「ぷちナショナリズム」「ネット右翼」

などの、ある種の右傾化の動きが鎮静化した昨今、「生きづらさ」（それは本稿の用語だと〈疎外〉感と言い換えてもいいのではないだろうか）を抱えた若者層の間では、プロレタリア文学の名作『蟹工船』ブームや、「超左翼マガジン」をうたった『ロスジェネ』（かもがわ出版）の創刊などに象徴される、「ぷちサヨク化」とも呼ばれるようなある種の左傾化の動きも起きている。

このように、現代日本社会で若者たちが抱える〈疎外〉感の埋め合わせとして、何らかの処方箋が切実に求められているのは事実だろう。本稿第4節において評者も、「憂慮すべきなのが〈疎外〉感なのであるとすれば、普遍なり第三者の審級なりを確保して自分自身を相対化すること、それ自体が重要なのであって、そう考えると、例えばそのためのとりあえずの処方箋が『あえてナショナリストになること』であっても構わないのではないだろうか。もちろん、『あえてアナキストになること』であってもいい」と指摘した。

本書出版後に著者が提示した、「他者が、まさに他者である限りにおいて接近してしまう」というような状況で、「究極的な偶然を必然として受け入れる」という方途（著者はそれを「愛」とも呼ぶ）は、結局は、日本から遠く離れた、抽象的だからこそ逆説的にリアルな手触りのある世界に身を置き、そのようなものの象徴としての「他者」に囲まれることで、いわば擬似的に自己を二重に〈疎外〉された状況に追い込み、〈外部〉性を顕著化させサバルタン化することでサバイバルを図る戦略だと言ってい

いだろう。さて、このような処方箋は、「否定判断モデル」の担い手とされた者たちにとって有効なの

だろうか。そして、現実的なのだろうか。「真の〈普遍性〉は葛藤そのものに内在しているはずだ」という著者の主張は、論理的には首肯もできるが、どうせ〈外部〉化から逃れられないのだから〈外部〉性を顕著に、どうせ〈疎外〉から逃れられないのだから二重の〈疎外〉へという、ポストモダン的な、逆説的な「乗り越え」方は、著者がその可能性を見出している「無限判断モデル」の在日朝鮮人二世の姿を、多少なりとも知る立場にある評者にとって、個々人に負荷がかかりすぎるように思われてならない⁸。

ナショナリズムについての著書も多い在日朝鮮人二世の政治学者、姜尚中は、「周りを見渡すと、『落伍者』のような扱いを受けた『在日』の境遇が、大方の日本人にふりかかろうとしているのである。それは、大きさに言えば、日本国民の『在日化』と言えるかもしれない」と指摘する（姜 [2004]2008:196）。このように、〈外部〉性——マイノリティ／マジョリティの枠組み、そしてサバルタン性——が相対的なものなのだとしたら、評者が本稿で言及したようなある時期までの朝鮮学校という空間にも、在日のみならずすべての人がサバイバルするための、何らかのヒントがあるかもしれない。

注

¹ 『読売新聞』2007年11月7日付によると、「発売4ヵ月で3刷り6,500部」で、「5,000円（税込み）と高価ながら」、「学術書としては異例の売れ行き」を見せた。第61回毎日出版文化賞も受賞している。

² 本稿では、外国人登録上の国籍表記の如何を問わず植民地時代の朝鮮半島にそのエスニックなルーツを持つ人々（いわゆる「オールドカマー」）の総称として「在日朝鮮人」という用語を使うが、文脈に

応じてその略語としての「在日」も使用する。

³ 在日朝鮮人が、在日朝鮮人の子どもたちに対する自主的な民族教育を行っている全日制の学校。日本の学制に合わせて6・3・3・4制で、2003年度現在、小学校にあたる初級部64校、中学校にあたる中級部42校、高等学校にあたる高級部12校、大学にあたる大学校1校が、朝鮮民主主義人民共和国を支持する在日朝鮮人の民族団体、在日本朝鮮人総連合会（朝鮮総連）の管轄のもと、日本各地で運営されている。朝鮮総連中央本部教育局によると02年度現在、初級学校から大学校までの在籍者の総数約1万4千人で、その数は就学年齢にある全在日朝鮮人の1～2割程度とされる。外国人登録上の朝鮮・韓国籍はもちろん、日本その他の国籍を有する子どもたちが通う。校内での朝鮮語使用を原則とし、カリキュラムも朝鮮語、朝鮮と在日朝鮮人の歴史、地理、社会などの民族教育に力を入れている。他科目においては日本の学校、つまり学校教育法第1条で定める「1条校」と同レベルを保てるよう努めているが、「各種学校」である朝鮮学校の法的地位は「1条校」に比べて格段に低く、助成や資格などの面で大きな格差が存在する。

⁴ 本稿は、本書出版直後の2007年9月27日に行われた「ナショナリズム・エスニシティ研究ネットワーク NATIO」における書評会での報告にもとづいたものである。

⁵ 自殺のはっきりした原因はいまだ明らかになっていない。『在日親子』というドキュメンタリー番組を制作したディレクターの井ノ川泉は、作品制作のきっかけが、大学時代に金鶴泳の作品と出会って衝撃を受けたことだったとしたりうで、「彼のことを卒論で書こうと思って、彼は自殺してしまったのですが、ご遺族の方に会いに行ったんです、群馬の田舎に。お父さん、お母さん、妹さんや弟さんなどに会ったんですが、妹さんがお兄さんの小さかった時

のこととかいろいろ話してくださった最後に、『私にはひとつだけ心残りがあります。井ノ川さんが、もしも生きているうちに兄に会ってくれていたら、兄は自殺しなかったかもしれない』と言ったんです。つまり、自分の話を、たった1人でもいいから日本人に聞いてほしかった、だけど、周りには、話を聞いてくれる日本人が1人もいなかった、そういうことだと思うんです」と語っている（2003年7月17日、第25回びあフィルムフェスティバルにおける上映会後のトークショーで）。

⁶ 著者は今年6月に秋葉原、7月に八王子で派遣社員・契約社員による無差別殺人が続いたこときっかけに、若年労働市場における非典型労働者（非正社員）や無業者の過酷な状況が注目されているとして、『週刊東洋経済』8月9日付に「若者に広がる二つの『疎外』とは」というコラムを寄せている。ここで著者は、彼らの地位について「疎外が重層化している」——「Xから疎外されている」のではなく「『Xへの疎外』から疎外されている」——と分析したうえで、この状況は、その仕事が普遍的な価値・使命Xとのつながりを欠いているという点では同じなために典型労働者（正社員）にとっても変わらないが、重層的な疎外、「『Xへの疎外』からの疎外」がもっとも露骨に明示的に現れる場所が、非典型労働者だと強調している。著者によれば、そのような重層的な疎外のために彼らは左傾化せず右傾化するのであり、それは、右翼系の言説や運動がアイデンティティやそれに伴う自尊心に訴えるからであり、特殊な共同体に所属することからくる、尊重に値する（とされる）アイデンティティを提供するからである。

⁷ 中島岳志は「ナショナリズムを全否定したり、あるいはナショナリズム＝悪だという簡単な立場に立ったりすること」を否定し、「解体しなければならないのは、ナショナリズムが原初性を偽装して

いる部分であって、初発のナショナリズムは『国家は国民のものである』という国民主権の主張としてあったわけです」と主張する。同時に、「ナショナリズムというものは、実存やアイデンティティそのものではなくて、政治的なパイを獲得するための非常に有効な方法であったし、これからもあり続けると僕は思っています」と指摘し、ある意味当然のことながら、前述した雨宮・萱野の主張とは「何のための方法なのか」という点において立場の違いも見せている（2008年1月22日に行われた『思想地図』創刊記念シンポジウム「国家・暴力・ナショナリズム」より、『思想地図』vol.1:20）。

⁸ 本稿第3節の冒頭でも述べたように、著者が「無限判断モデル」に位置づけた金鶴泳は1985年1月、46歳で自ら命を絶った。はっきりした理由はいまだ不明だが、これについては著者自身が在日本大韓国民団の機関紙「民団新聞」2007年8月15日のインタビューで、母国のナショナリズムにも馴染めず、自分を疎んでいる日本社会にも同化できなかった金鶴泳は「両者が鋭く切り立った鋸の歯のような尾根道を、まさに在日としての狭い狭い境界の尾根道を、ヤジロベエのように平衡をとりながら歩き続けていた。それは至難の道程

だった。そして、彼はどちらの斜面へ転がることもなく、自ら命を閉じてしまった」と語っている。著者は続けて、「在日ナショナリズムがあるとするならば、この狭い境界としての尾根道ではないだろうか」と指摘したうえで、「マイノリティだからこそ、普遍的価値が喪失した時代の、新たな普遍性を見つけやすい立場にいるとも言える」と主張しているが、金鶴泳の死を思い起こすまでもなく、やはりその主張はいささか楽観的過ぎやしないか。逆に言うとそれは、そのような「尾根道」を意識せざるをえない「苦しい立場」にあると同じインタビューで著者自身が認める在日にとって、厳し過ぎる茨の道なのではないだろうか。一方で本稿執筆中の今年8月26日、著者が「乗り越え」のひとつの方途としてその活動について繰り返し言及していた中村哲医師が代表を務めるNGO「ペシャワール会」の会員として、4年前からアフガニスタンで農業指導を行っていた伊藤和也さん（当時31歳）が武装グループによって拉致され、翌27日、遺体で発見された。両者をひとくくりにして論じるのは間違いかもしれないが、サバイバルとはかくも過酷なものなのだろうか。至極シンプルに考えて、かかる負荷は、少ない方がすべての人にとって幸福だとは言えないか。

文献

- Anderson, Benedict, 1991, *Imagined Communities : Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London and New York : Verso, Revised Edition. (= 1997, 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT出版)
- 雨宮処凛・萱野稔人, 2008, 『『生きづらさ』について——貧困、アイデンティティ、ナショナリズム』光文社新書.
- 韓東賢, 2005, 「メディアの中の『在日』と『朝鮮学校』、そのリアリティのありか」『現代思想』33(4): 214-223.

姜尚中, 2004, 『在日』 集英社. (2008, 集英社文庫.)

金泰泳, 1999, 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて——在日朝鮮人のエスニシティ』 世界思想社.

大澤真幸, 2007, 『ナショナリズムの由来』 講談社.

——, 1996, 「ネーションとエスニシティ」『岩波講座 現代社会学 24 民族・国家・エスニシティ』 岩波書店, 27-66.

佐伯啓思・大澤真幸, 2005, 『テロの社会学』 新書館.

竹田青嗣, 1983, 『〈在日〉という根拠』 国文社.

外村大, 2004, 『在日朝鮮人社会の歴史学的研究——形成・構造・変容』 緑蔭書房.

(ハン・トンヒョン、東京大学大学院総合文化研究科、hann@kd6.so-net.ne.jp)

(査読者 明戸隆浩、曹 慶鎬)